

項 目		内 容				実 績							
1. 国内		(1) 生産・処理動向調査((一社)日本食鳥協会2月下旬実施)によると、1月の推計実績は、処理羽数はほぼ前年並み(前年比100%)だったものの、主要産地(北海道・東北地区が同99.2%、南九州地区で同99.5%)が共に前年を下回り、廃棄合計も4.07%(同0.58%増)となったこともあり、処理重量が前月時点での計画170.6千t(前年比99.7%)から更に下回り169.0千t(同98.8%)となった。前月から引き続き各地区で大腸菌症の発生や、出荷重量の計画割れ(出荷間際の伸びに欠ける)等、特に南九州地区で回復が思わしくなく前年比で1.9%下回った。				生産状況							
		(2) 2月~4月で、2月は処理重量が165.3千t(前年比101.6%)と前年を上回る計画となっているが、各地区で大腸菌症の発生等が報告されており下方修正も考えられる。ALICの需給予測でも前年を下回る(2月で前年比97.2%)とされている。3月は、前年に比べ日曜日が1日多い関係で処理羽数60,555千羽(同99.8%)・処理重量179.6千t(同99.6%)と計画された。4月は逆に前年より日曜日が1日少ないこともあり処理羽数59,633千羽(同103.4%)・処理重量175.6千t(同101.5%)と計画された。体重の伸びの回復がポイントとなりそうである。				単位:千羽、千トン、%							
2. 輸入		(1) 財務省が2月27日公表した貿易統計によると1月の鶏肉(原料肉)輸入量は41.98千t(前年比86.9%)で、輸出入協会の予測(44.4千t)より下振れし、単月では昨年9月(40.26千t)以来42.0千tを下回った。今後について輸出入協会では2月44.8千t(同96.0%)・3月40.0千t(同92.1%)と予測しており、4万t程度の輸入が続くような状況となった。「ブラジル産の相場は年末からジリジリと上昇傾向にあるが、今後、春先にかけての船積み数量が不明で価格の変動も読み切れない状況にある。タイ産は価格が少しづつ上げに転じており今後の為替の動きや中国市場の動きに注視する必要がある。」とコメントしている。				輸入動向							
		(2) また鶏肉調整品の1月輸入量は42.38千t(前年比101.3%)。前月(12月)は前年割れ(同95.8%)したものの再び前年超えとなった。また単月では原料肉の輸入量を上回った。タイが前年割れ(同98.6%)の25.1千tとなったものの、中国が16.9千t(同104.5%)と回復し、さらに輸入比率は低いもののベトナム141t(同147.4%)・ブラジル94t(同400%)と増加しており、今後の動向に注視する必要がある。				単位:千トン、%							
1. 家計消費		(1) 総務省統計局発表の家計調査報告によると、12月は、全国一世帯当たりの3畜種消費(購入)数量は4,456g(前年比104.9%)と前年は上回ったが金額は1,420円(同97.6%)と下回った。牛肉は安価な輸入牛でのローストビーフおよびステーキ用等が増加。豚肉・鶏肉はともに暖冬の影響等もあり鍋物需要が中旬までは低調に推移した。クリスマス需要で若干盛り返したが、月間トータルでは金額が伸びなかった。特に鶏肉はむね肉の需要拡大等で数量は1,765g(同107.6%)と前年を上回ったが、金額は相場安・単価安もあり1,665円(同96.4%)と3か月連続で前年を下回った。				消費動向(2人以上の世帯)							
		(2) 食品関連スーパー3団体の販売統計速報によると、「1月の畜産部門の売上高は1,045億円で全店ベース前年比0.5%減で既存店ベースでも同1.6%減少した。前年より気温が高い地域が多く、鍋物用を中心に動きが悪かった。牛肉は焼肉やステーキ用など焼きメニューが堅調だが、年始はブランド牛の動きもよかったが、その後は輸入牛が牽引した。豚肉は相場が下落傾向にあり、価格訴求により販売数量を伸ばした店舗が多かった。鶏肉は気候条件に加え、相場の低下も影響しており、伸び悩んだ。ハムやソーセージなどの加工肉を特に不調にあげるコメントが多かった。」との報告がなされた。なお、食品の総売上高のうち前年を上回ったのは、弁当やおにぎりに加えオードブル等が好調だった惣菜部門(同1.6%増・同0.2%増)のみであった。				単位:グラム、円、%							
2. 量販・卸		(1) 日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによる12月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比93.9%の4.1千t。うち国内物は同92.7%の3.3千tと前年を下回り、輸入物も同99.5%の0.8千tと報告された。輸入物は1~12月累計では同127.6%と大幅に増加しているものの、全体の18.2%となっている。サラダチキン向け等の需要が堅調であるなか輸入物の比率が着実に伸びてきたが、国産むね肉価格が比較的低位で安定していることや、国産志向や味の面から国産むね肉での製造が見直される傾向にある。				相場(年別・暦年)							
		(2) 食品関連スーパー3団体の販売統計速報によると、「1月の畜産部門の売上高は1,045億円で全店ベース前年比0.5%減で既存店ベースでも同1.6%減少した。前年より気温が高い地域が多く、鍋物用を中心に動きが悪かった。牛肉は焼肉やステーキ用など焼きメニューが堅調だが、年始はブランド牛の動きもよかったが、その後は輸入牛が牽引した。豚肉は相場が下落傾向にあり、価格訴求により販売数量を伸ばした店舗が多かった。鶏肉は気候条件に加え、相場の低下も影響しており、伸び悩んだ。ハムやソーセージなどの加工肉を特に不調にあげるコメントが多かった。」との報告がなされた。なお、食品の総売上高のうち前年を上回ったのは、弁当やおにぎりに加えオードブル等が好調だった惣菜部門(同1.6%増・同0.2%増)のみであった。				単位:円							
3. 業務・加工筋		(1) 日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによる12月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比93.9%の4.1千t。うち国内物は同92.7%の3.3千tと前年を下回り、輸入物も同99.5%の0.8千tと報告された。輸入物は1~12月累計では同127.6%と大幅に増加しているものの、全体の18.2%となっている。サラダチキン向け等の需要が堅調であるなか輸入物の比率が着実に伸びてきたが、国産むね肉価格が比較的低位で安定していることや、国産志向や味の面から国産むね肉での製造が見直される傾向にある。				在庫状況							
		(2) 日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによる12月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比93.9%の4.1千t。うち国内物は同92.7%の3.3千tと前年を下回り、輸入物も同99.5%の0.8千tと報告された。輸入物は1~12月累計では同127.6%と大幅に増加しているものの、全体の18.2%となっている。サラダチキン向け等の需要が堅調であるなか輸入物の比率が着実に伸びてきたが、国産むね肉価格が比較的低位で安定していることや、国産志向や味の面から国産むね肉での製造が見直される傾向にある。				単位:千トン、%							
1. 30年12月		(1) 推計期末在庫は国産26.1千t(前年比97.1%・前月差△2.4千t)、輸入品133.3千t(同94.7%・同△4.4千t)と合計で159.4千t(同95.1%・同△6.8千t)となった。生産量が9.9千t増加し、輸入量も3.8千t増加したが、国産品の出荷量が生産量を上回ったため、国産品の在庫が減少した。輸入品も出荷量が8.2千t増加の43.2千tとなったため、在庫は若干の減少となった。				在庫状況							
		(2) 推計期末在庫は国産26.1千t(前年比97.1%・前月差△2.4千t)、輸入品133.3千t(同94.7%・同△4.4千t)と合計で159.4千t(同95.1%・同△6.8千t)となった。生産量が9.9千t増加し、輸入量も3.8千t増加したが、国産品の出荷量が生産量を上回ったため、国産品の在庫が減少した。輸入品も出荷量が8.2千t増加の43.2千tとなったため、在庫は若干の減少となった。											